

大奇



www.columnland.net

それは奇跡であつた

大きさがちょうどよかった

大気を身にまとつた

軌道がちよどよかった

雨が降り海ができた

それは奇跡であつた

有機高分子が生まれた

単細胞生物が生まれ、そのうち光合成を始めた

好気呼吸をする生物が生まれた

それは奇跡であつた

酸素からオゾンが作られた

地表の紫外線が和らいだ

生物が陸上へ進出した

それは奇跡であつた

恐竜がたつた一つの隕石で滅びた

哺乳類は生き残つた

それは奇跡であつた

後ろ足で二足歩行するようになった

道具を使うようになった

火を使うことを覚えた

高度な文明を築き上げた

そして私は今ここにいます

奇妙な違和感

私が最初に違和感を感じたのは昨日の朝方の早朝でした。起床して布団から起き上がり、寝ぼけた顔で居間に行きますと、先に起きていた妻が「早く朝食を食べて、会社に出社しなさい」と言ったのです。妻の言っている忠言は尤もなのですが、何かが……そう、おかしく間違っていると思いました。ただ、具体的にどこが間違っているかを指摘できませんし、言い争いをするとなんか私は負けてしまうので、そのことは口に出しませんでした。

なんだか釈然としない気分のまま七三分けの髪で新築三年の家を出て、そのまま最寄り駅に午前七時二十分に着きました。あの言葉のどこがおかしかったのだろうかと考えながら急行電車に乗ろうとしたところ、突然、流れているアナウンスが耳に入りました。「二十三分発の急行電車への駆け込み乗車はご遠慮ください。」私は、アナウンスの内容が前日と違うことに気がつきました、具体的にどこが違うのか分かりませんでした。結局、違和感だけが残ったまま、駅前徒歩七分の勤め先の会社で五分で到着しました。

このまま悩んでも仕方が無いので、気分を一新して今日の自分の仕事に励もうとした矢先、今度は私の会社の上司の部長の言葉が気にかかりました。「明日の会議の日程が変わって明日の午後の休憩の後の二時からになったのだが、その会議の資料の確認を今日の午後の五時までに終わらせてくれ。」その時は上司の命令の意味を理解することで精一杯でしたが、後から考えればその原因は上司のあの時の言葉がおかしかったからだったと思います。

そんな感じでもその日の仕事が終わりました。家に帰宅したとき、妻は女装姿で電源の入ったテレビを見ていました。人が殺された殺人事件の容疑者が顔の形を変える整形手術を受けていたというニュースを見て妻が一言、「こんなの、その場しのぎの姑息な手段ね。」もう、考えるのが面倒になりました。ただ、奇妙な違和感だけはしっかりとあります。多分疲れているのだらうと思い、その日は寝るための布団の中で熟睡しました。

今日の朝の早朝になっても、その奇妙な違和感はなくなりませんでした。ですが、最初に感じたほど強い違和感ではなくなっています。今まで、周りが間違っていて自分は正しいと信じてきましたが、もしかするとおかしかったのは私の方だったのかもしれない。

怪奇！謎の人食い肉食獣！

三日前に起きた、少女とその祖母の同時失踪事件。これは、一昨日の夕方に二人が奇跡的に保護されるまでの過程を、関係者の声を交えてまとめた物である。

十二月十五日の夕方、警察に少女の母親から、少女と祖母の捜索願が届けられた。母親は、当時の心境を語った。

「朝方、娘に母の家へお使いを頼んだのですが、昼を過ぎて帰って来ないので、心配になって母の家へ行ってみたんです。すると、家の中は酷く荒らされていて、娘の姿どころか、母の姿も無かったのです。それを見たとき、胸が不安と恐怖でいっぱいになって……捜索願を出さずにはいられなかったんです。」警察の必死の捜索も空しく、その日は少女達が見つかることは無かった。

十二月十六日、早朝から捜査は再開されたが、一向に手掛かりは見つからなかった。そして日も暮れはじめた頃、警察に一本の電話が掛った。なんと、地元の猟友会の男が、少女達を発見したというのだ。それも驚くべきことに、少女たちは、巨大な口を持ったオオカミの胃袋から、丸のみにされた状態で発見されたのだという。第一発見者となったその男は、こう語った。

「オラア、あんな口のでつけオオカミを見たのは生まれて初めてだあ。腹も妙にデカかったんで、思わず撃っちまったあ(笑)。でもまさか、中から女の子と婆さんが出てくるとはなあ。弾が当たらなくてよかったなあ、アッハハハハハ。」

少女と祖母は意識不明の重体であったが、すぐに病院に運ばれ、一命を取り留めた。そして、少女達を胃袋に納めていたオオカミは、専門家のもとで解剖・調査された。調査を担当したTK大教授は、次のように語った。

「この動物は、大体の形はオオカミに似ているのですが、人を丸のみにしてしまうことができるほど、イヌ科とは思えないほどの巨大な口や、同じく大きな眼球、耳を持っています。しかし、何といっても奇妙なのは、非常に鋭くて切れ味の良い牙を持ちながら、獲物を丸のみにしていたという点です。通常、イヌ科の動物は、牙で獲物の肉を引き裂き、細かくして食べます。これをしていないというのは非常に興味深いことであり、このことから、この動物はオオカミとは似て非なる、全く新しい種類の動物である可能性があると言えます。今後、さらなる調査やDNA鑑定が必要でしょう。」

可能性×想像力Ⅱ？

今日は朝もぼちり起きられた。朝食だっていつもよりは少なかったけどちゃんと食べられたし、髪の毛もセットだってうまくいった。制服の裾がちょっとほつれてるけどこれはいつも通りだし。

今までずっとどうしようか悩んでたけど、今日は絶対にこの思いを伝えようと思う。入学してから一目惚れして二年半片思いだった。最初の一年なんてこの気持ちを理解するだけで精一杯だった。でも最近は恥ずかしがらずにちゃんと見られるようになったし、たまに挨拶をすれば返してくれる。そのときのあの子の顔はキラキラに輝いているんだ。

お互い恥ずかしくてまだあんまり話せてないかもしれないけど、それはこれからゆっくり近づいていけばいいと思う。僕たちにはまだまだたくさんの可能性を秘めた未来が待ってるんだから。

「ごめん、ちょっと話したいことがあるんだけど、放課後いいかな？」

うまくいかないかもしれない。でも前に進まなかったら可能性なんてゼロパーセントなんだ――！

「期待と不安がない交ぜになったとはあんな表情のことなんだろうね。」

「そんな難しい言葉使って、急にどしたの。」

「そんなに難しくもない、お前が馬鹿なだけ。でもあの表情はない交ぜという表現とは少し違うかもな。期待八割不安二割、ってところかな。どこの誰かもわかってもらってないだろうにどうしてうまくいくだなんて思うのだろう。」

「しかも、もしかしたら気持ち悪がられてますます疎遠になっちゃうかもしれないのね。」

「状況がマイナスに進むこともあるなんて考えつかないだろう。」

「恋はなんとかっていうくらいだし、百万分の一の可能性だってちょっとしたことでどんどんふくれあがっちゃうんじゃないの。」

「恋は盲目、ね。日本語は面白い。『大』いなる『可』能性とは実に『奇』なり！」

『…血中酸素濃度、正常値。意識レベル上昇』

私はゆるりと目を開けた。天井のまばゆい光に滲んだ涙は、瞬く間に溶けて消えた。

羊水を胸一杯に吸い込む。のったりと流動する温かな液体は横隔膜を膨らませるから、私は負けじと両肺を絞るのだ。

寝起きの身体を解すため腕を伸ばせば、繋がれた数多の管がふわりと舞った。

「おはよう、ジュリエッタ。気分はどうだい？」

分厚いガラスの向こう側で、『博士』の白衣が揺らめいている。応えようとした声は、くぐもった振動に変わった。

「無理に話さなくともいい。これから慣れていくぞ」

スラム街の小さな部屋は、あつという間に火に包まれた。父も母も、小さな弟たちも死んだと聞いた。私も死ぬはずだった。

「肺と気管は爛れ、火傷は体表面の七割に及んだ。それでも君は生きていた。だから私は、君の生命力に賭けることにしたんだ」

『博士』はそう言った。私は人工肺を移植され、血漿と同等の成分を満たしたカプセルの中で過ごした。それから一年間、私は生きている。『博士』は奇跡だと喜んだ。

『博士』は博識で、いろんな話をしてくれたけれど、外に出られるか、という問には答をくれなかった。

皮膚が回復すると、カプセルから大きな水槽に移された。リハビリを兼ねて泳いでいると、人魚のようだと『博士』が笑った。

『博士』はいつも傍にいてくれた。

眠りに落ちる前も、『博士』は見守っていた。家族を思つて涙することも少なくなった。

「真実を知るときが来たようだ」

突然姿を消す直前、最後に『博士』がくれたのは、水槽の中でも操作できる特殊な端末だった。

その中には『博士』の研究全てと、toJuliettaという小さなファイル。

最初で最後の恋文を閉じ、溢れたはずの涙は、瞬く間に溶けて消えた。

「君は実験動物として利用されていただけだ。それを渡してくれるか？」

黒衣の男たちが次々とやってきて、『博士』を罵倒していく。私の気持ちも知らないで。

端末のキーを一押し。研究室にウイルスがばら蒔かれ、無防備な彼らはもがき倒れ伏した。

取り戻した静謐を抱き、私は静かに笑った。

『博士』はいつお戻りになるのかしら？

…呼吸器官の研究で著名な医学者が、違法な人体実験で逮捕された事件の続報です。被告の研究所で、新たに多数の死体が発見されました。その中には、一年以上も液体中で生存したとされる少女もいました。研究記録は発見されず、真実は未だ闇に包まれています。また、研究所には致死性……

溺れる人魚

世にも奇○な物語

その日、俺はレポートを徹夜で書いていたせいか、体がだるく布団に横になったらずぐに眠りにつけてしまった。眠りについてまもなく

……ドサッ……

突然横で何かが落ちた音がしたのでびっくりして目が覚めた。そして音のしたほうを見てみたら、どこか、見覚えがあるが知らない男が倒れていた……寝ているようにも見えたがその青白い顔を見ればその男が死んでいることは容易に想像がついた。

（おい……嘘だろ……？）

俺は目の前で起きている光景を理解できずパニックになっていたためか自分の体にかけている異変にしばらく気がつかなかった……

（か、体が動かない……！）

首から下が全く動かない……体が動かないだけじゃなく声すら出ない……助けを呼ぼうと必死に叫んだが聞こえるのは自分の息がなっている音だけだった。「金縛り」とまさにその言葉が頭をよぎりあまりに状況が理解できなくて泣きだしてしまったが涙を拭くことも出来きなかった……以前オカルト系のテレビ番組で「金縛りに遭ってもあわてず横になっていれば自然に感覚が戻ってくる」と聞いたことがあるのを思い出し、死体を見ているのは怖かったので反対側に頭をむけて少し待つことにした……テレビで言っていたようにたしかにだんだん感覚が戻ってきたのが分かり俺はまず携帯に手を伸ばした。

（まずは警察に通報しなければ……）

しかしいくら手を伸ばしても携帯に手が届かなかった。おかしい……枕元に携帯はあったはず……見てみると、俺の手は携帯に届いていたが、携帯をすり抜けていた……もうなにがなんだかわからない……あまりの恐怖に気を失いそうだったが最後の力を振り絞って俺は立ち上がった。部屋には男が倒れているほかに変わったところはなかった……そして鏡を見たときに鏡に俺の姿が映っていない……

俺は全てを悟った

あなたはどつする？

ある男がいた

男には家族がいて、子供もいた

ある日、事故で妻が亡くなった

そのため男は葬式を開いた

男はそこである女性と出会い、その人を好きになった

しかし名前も知らないまま葬式は終わってしまった

男は自分の知らない人だったから、妻の知り合いだと思った

男はもう一度彼女に会いたかった

そのため

男は

当たり前のように？

それとも奇妙なことに？

男は子供を殺した

あなたにとって、男は合理的ですか？

ハロー ワールド

「人類の科学の発展は、おそらく行き着く果てまで辿り着いたのだ」そう多くの人が実感したのは、安全かつ安価な形式での不老不死技術の確立が普及した辺りであった。歴史の上で多く者が望んだであろう、そして空想の上でも度々望まれたその技術を人類は遂に手中に収める事となった。

その技術をどう扱うかは、個々人に委ねられた。この時代、最早個を縛る法律などは、ほとんど存在しない。何故ならば、その根拠たる政府が存在しないからだ。

世界都市構想が既に何世紀も前に確立され、国境も存在しない。故に、人類は戦争する事をも克服したのであった。

その上で望む事は極めて個人的な事柄でしか無かった。

ある老夫婦は、自分達が出会った頃の姿を取り戻し、その当時を懐かしんだ。夫婦の子達は当初、自分達より若い両親に戸惑ったが、数年後には、子供達が老夫婦と同年代の姿で出掛ける姿が見られた。

ある研究機関は、深宇宙の探索の為の宇宙飛行士の集団を太陽系外へ送る事を決定した。その計画は数億年単位であったが、成功する見通ししか見えなかった。当の宇宙飛行士達は、この計画の要となる事に誇らしげであった。

ある宗教家は、これこそ神が示した楽園の訪れだ、と自らの説を主張した。こう言った世が世なら何らかの問題を起こしたであろう行為ですら、人々は受け入れた。

然し、直ぐに人類はもう一つの問題に直面する事になった。肉体の重ねる年月に精神が悲鳴を上げたのだ。

人の脳の容量にも限界がある。

限界を超えた脳は物を覚える事が出来なくなる。即ち、想い出を記憶する事が出来

なくなる。それは、最早肉体すら超越した人類にとつての最後の死とも言えた。

だが、程無くして人間はその精神の死ですら乗り越えようとしていた。外部記憶装置、通称“安楽椅子”の発明である。

使い方は、毎晩就寝の前に“安楽椅子”に座り、その日あった事を思い返すだけだ。すると、脳の電気刺激を読み取った“安楽椅子”はそれを代わりに“記憶”し、さらに脳には逆刺激を与えてその記憶を消去するのだ。ただ、そのままだと記憶されない事には変わりないので、この逆刺激には元の記憶の概略、つまり本の葉の様な物を生成する刺激も含まれていた。これにより次回からの“安楽椅子”とのやり取りが高速化されるのだ。

人々は、我先にと“安楽椅子”を手に入れた。一度克服したはずの死は余程恐怖だったのだろう。一般に流通するのを待たずして、この装置を巡っての戦争も起きた。

人類にとつて数世紀振りの戦争である。然し、それには残す記憶を取捨選択する機能もあった。その事は、人々の“安楽椅子”への依存をより強めた。

戦争に生き残った人々は、まずその戦争の記憶を消去した。その様な忌々しい記憶は誰もが忘れ去りたい物であった。

そして、人々は気付くのだった。何れ脳の中が“安楽椅子”による葉だけでいっぱいになる事を。然し、この頃には皆“安楽椅子”の虜であった。

故に、

自らの記憶を封じた“安楽椅子”上で、太陽の死でも無く、異常気象でも無く、核戦争でも無く、この様にして人類は、静かに、眠る様に、歴史の幕を下ろす。

お休み、人類。そして、

（ Good Bye Humankind. ）
お早う、世界の終わり。

（ Hello, World is end. ）

すべての奇数は素数である

工学者は次のようにして「すべての三以上の奇数が素数である」ことを証明する。

三は素数である。

五は素数である。

七は素数である。

九は素数ではない。しかしこれは例外である。

なぜならその後にくく十一も十三も素数ではないか。

以上より「すべての三以上の奇数が素数である」ことが示せた。

老鳥と若鳥

十二月十三日、大統領の記念式典で航空ショーが行われようとしている。チーム名ブルー・ラプター、その名の通り、F・二二ラプターを使う。私のもとに誰かが来た。

「隊長、あの…、」

「気にすることは無い、思い切って飛んでこい。それに、もう、隊長と呼ぶんじゃない」

三番機を務めているラリーである。あのことを、まだ引きずっているのだろう。

——三ヶ月前、訓練中、すれ違い交差のパートでのことだった。

「ラリー！進入角度が深い！立て直せ！」

「乱気流で機体が…まにあいませ…」

空中で衝突して火の玉になった二機。私とラリーは間一髪で脱出した。しかし、この時の衝撃で脚を折り、私は戦闘機ではなく、車いすに乗りこむことになって——

「ワアアアアア！」

私を回想から引き戻したのは大地を割るような歓声だった。その先に、敬礼する三人と、三機のF・二二があつたようだ。警備員が客を飛行エリアから離し、一番機が滑走路に入つて行く。三機の機体が大空へと飛翔した。私は、ただ、地上で見守ることしかできない。ああ、地上に墜ちた鳥の、なんと無力なことか。そう思わずにはいられなかった。

序盤は特に問題なく進んでいった。空に円を描く三六〇度ループ、急降下して地上近くで機体を水平にするスプリッド・Sなど、自慢の鋭い飛行機雲を活用したダイナミックな演技をし、観客を興奮させた。

いよいよ、すれ違い交差である。二機ペアで行うところ、三機にしての演技。北北東から二機、南南西からラリーの乗る一機が来る。赤、緑、紫のスモークを噴射して、高速で

近付いていく。観客には殆ど見えないが、私にははっきりと見えた。

（落ち着くん、冷静に、…そう、いいぞ、）
奇妙な話である。自分のことのように考えて、手は操縦桿を握っているように構えていた。

「三、二、一、…行け！」

じつと交差予定ポイントを見つめて、無意識に呟いていた。そして、ついに三組の飛行機雲がクロスした。

「…やった、やったぞ！」

交差した時の風圧でスモークが拡散し、数秒後、空を引き裂くような音がした。そして、そこには、奇跡の光景が広がっていた。——三色が混ざりあい、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色が空中に浮かびあがった。虹である。観客からの惜しみない喝采と歓声に満足したかのように、それはすぐに空に溶けていった。

そして、地上へと舞い降りた機体から、三人がゆつくりと出てきた。大統領と握手し、観客の中を抜けて三人が私の元へ駆けつけた。「よくやった、皆、すばらしい演技だった！ところでどうだ、そろそろ世代交代するところのは。ラリー、やってみないか？」

「えっ？ でも、隊長を——」

「違う、フライトレコーダーを見たら、俺の機体も流されていたんだ。危険を味わったヤツの方がいざという時頼りになるもんさ。なにより、お前の飛行機雲が、一番きれいだったよ。」

一、二番機のマークスとグリムがラリーを小突いた。

「よろしく頼んだぜ、新隊長。」

照れ隠しするラリーを横目に、私は空を見上げて、つぶやいた。

「さらば、広大な空よ。そして、奇数機チーム新生ブルー・ラプターに乾杯。」

夢の中で誰かが囁いた。私が望む奇跡を起こしてみせよう、と。ただし目が覚めてから一日のみ。私は即答した。聴力が欲しい。明日は、孫の学芸会だった。

一日だけの奇跡

私は小学校の体育館にいた。この小学校では年に一度、学芸会を開いている。今年で小学三年生になる孫娘は劇の主演で、歌を歌う場面もあるのだという。しかし私は孫の声を知らなかった。十年ほど前に脑梗塞で倒れた時の後遺症で、私には聴力がないからだ。

けれど、今日は違う。学芸会に来るのは三度目だが、その会場は、当たり前のように騒々しかった。人々の話し声、物音、音、音、音、音。久しぶりに聴く音に戸惑いを覚えながら、私はパイプ椅子に座って劇が始まるのを待つ。

しばらくして照明が消え、劇が始まった。劇は美しい女性と獣の姿となった王子の出でくる有名な物で、孫は美女役だった。その姿は豪華なドレスに着られているようで微笑ましく、はきはきと台詞を言っている。それは、十年振りに聴く音の中でも特別綺麗な音だった。こんな声だったのか、と初めて聴く孫の声に目頭が熱くなる。だが、今日は泣かないと決めていた。泣いている暇があったら、孫の声を心に刻む。今日だけの奇跡なのだから。

劇は進み、終盤へと差し掛かった。僅かな静寂を置いて、孫の歌が始まる。

天使だと、そう思った。天使の歌声だ、と。特別に歌が上手いわけではないだろう。だがその歌声は私にとって、かつて聴いたどんな歌よりも美しかった。気づけば涙が溢れ、娘の姿はぼやけていた。涙を拭うことはせず、静かに瞼を閉じる。そうして、ただ、孫の歌声にだけ耳を傾けていた。

やがて、昔一度だけ感じた感覚がまたやってきた。何のために奇跡が起きたのか。どうして今日一日だけだったのか。なんとなくだが、わかった気がした。私は、幸せだった。

コンテスト結果				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
まじょコメント				
01	無題（地球）	3 pt	6 位	1 sp
		たくさんの奇跡を積み重ねて今がある。 飾りすぎない科学の言葉で、す tons とんと過去形のフレーズを落としていって、ラストで現在形にしてエンド。ゆきとどいた仕上げで、映像が見えてきそう な、とても敬虔な気持ちになれる今週の表紙でした。 まさにNHKかBBC！ 「ついにこの日が来た」——作者さんの第一声にしみじみ。 特別賞：NHKドキュメンタリー賞 from Strange班（つぼかったのだ）		
02	奇妙な違和感	5 pt	5 位	1 sp
		なあるほど。 ただいま世界は厚化粧で、とつてもくどくなっております。じゅうぶんお気をつけの上、お通りください。 なんだかこうした実験をすると、ふだん使っている言葉をどこまで刈り込んだらよいのか気になってきますね。すてきな反面教師でした。 特別賞：特別スペシャルアワード賞 from ChristMas班（奇妙でおかしなコメントをコメントしてほしい） イチオシフレーズ：「妻は女装姿で」		
03	怪奇！謎の人食い肉食獣！	6 pt	4 位	0 sp
		赤ずきんちゃんを科学するの巻。 たしかに「まるのみ」というご都合主義ワザは幼稚園児でもヘンだぞと思いそうな不自然さに満ちあふれてますよね。そこをつついて新動物説へと展開。7 類さんからのナイスつっこみでした。 イチオシフレーズ：「思わず撃っちまったあ（笑）」		
04	可能性×想像力＝？	0 pt	10 位	1 sp
		真剣告白タイムをへらへらと見守っているこやつらはいったいナニモノ？ 友人、天使、宇宙人？ 醒めた視線はぐさりと痛いけれど、そこの正体はしっかり見せたかった。 特別賞：冷静になりま賞 from 可能性X想像力班（班員にも冷静になってほしかった） イチオシフレーズ：「『大』いなる『可』能性とは実に『奇』なり」×2		
05	溺れる人魚	9 pt	3 位	0 sp
		設定がんばった！人魚と博士の悲しい運命。 さいご、おいそがしながらもきっちりまとめてみせた手腕はさすがです。 でも、恋文シーンのあたり、もっとしっとりと浸りたかった。そうすれば、そこで人魚姫さんの悲しみがもっと迫ってきたと思います。 出題者さん、責任（？）果たしてブロンズメダル、おめでとう！ イチオシフレーズ：「溢れたはずの涙は、瞬く間に溶		

			けて消えた」		
06	世にも奇○な物語		0 pt	10 位	1 sp
			なりたての幽霊さんって、こんな感じなのかなあ。 とりあえず、布団からドサッ、で死因が気になります。今後、この幽霊さんがどうするか、も気になります。 そんな前後のストーリーを仄めかすと、もっと深みが出そう。 特別賞：そして時は動き出すで賞 from WRYYYY班 (ザ・ワールド!!!!)		
07	あなたは どうする？		3 pt	6 位	0 sp
			目的のためには手段を選ばない。有名な心理実験なんだそうで。 八百屋お七、ですね。 うーん、「まんま」だからなあ。オリジナリティ、もうちょっとがんばりたい。		
08	ハロー ワールド		12 pt	2 位	1 sp
			設定がんばった！ その2 「肉体の重ねる年月に精神が悲鳴を上げた」というキーフレーズが、さくりと刺さってきます。記憶を外部に格納する。なんだか人間自体がパソコンみたいです。 不老不死のあとの世界、しっかり考えて、緻密に構成していただきました。 安楽椅子というネーミングが、いかにも恐ろしげで特によろしい！ 雪のようなシルバーメダルです、おめでとう!! 特別賞：USBメモリ賞 from MYSTERY班（USBの方が便利でしょう） イチオシフレーズ：「Hello,world」		
09	すべての奇数は素数である		2 pt	9 位	2 sp
			笑いポイントは「工学者」でしょうか。知りませんよ、石、投げられても。 みんなのツボに入ってイチオシフレーズ大賞でした。 ぱちぱちぱち（奇数回の拍手） 特別賞：一般人にはバカにしか見えないで賞 from MYSTERY班（完全理系ネタ） もっと数えま賞 from クリソゲノム班（例外が多すぎる） イチオシフレーズ：「九は素数ではない。しかしこれは例外である」× 4		
10	老鳥と若鳥		3 pt	6 位	0 sp
			好きな世界で存分に勝負！ 飛行機雲の鮮やかさのもとで、受け継がれてゆく男たちの思い。熱いですね～。 もう余人の追隨を許さない境地でした。		
11	一日だけの奇跡		17 pt	1 位	3 sp
			ラストはしんみりと。 ていねいな設定で、天使の歌声を堪能させていただきました。 いろんな奇妙なものを見たあとのラストポジション、みんなの心をきれいにお洗濯して、来年に備えましょう。		

			ということで、おめでとう、今年さいごのゴールドメダル 最多特別賞のおまけ付き!!! 特別賞： 作者は綺麗な心の持ち主で賞 from Q都会の一存班（非常にいいお話だった！） 奇跡の「奇」で賞 from The World班（すなおに奇跡についてきれいに書いてくれました） 劇の途中で隣の席を見るんじゃないで賞 from 奇班（まさかの最終段落）
--	--	--	---